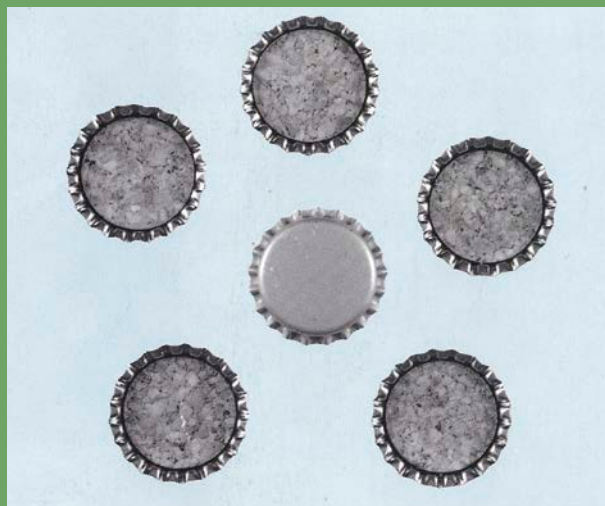


The history of NCC

日本クロージャー75年史



帝国プレス工業(株) 千住工場の従業員



コルク王冠

1941-1950

[昭和16年～昭和25年]

モノづくり魂と先見の明が 戦時下を生き抜く原動力に

1941(昭和16)年の冬、太平洋戦争開戦の火ぶたが切られて落とされた。日本軍の快進撃が報じられたのも束の間、各地で敗北を喫し戦局は悪化の一途をたどっていく。国民の生活は窮乏し、食糧は配給制に。軍需兵器の資源とすべく橋の欄干の金具や銅像、一般家庭では蚊帳の金具まで半強制的に供出させられた。

終戦を迎えたのは、1945(昭和20)年8月。人々は戦時中にも増して厳しい貧困生活を強いられた。しかし、どん底から這い上がる日本の復興は目覚ましいものであった。貧しいながらも物資の供給が進み、1946(昭和21)年には、水溶性

サッカリンや人工甘味料ズルチンの製造販売が始まる。冷蔵庫もクーラーもない時代、ラムネやサイダーが人々の喉を冷たく潤した。また、ウイスキーやビールの販売も再開されるなど、王冠業界でも特需に沸いた。嗜好品の普及にも、戦後復興の歩みが反映されている。

1947(昭和22)年に入ると、第一次ベビーブームが起こった。1949(昭和24)年までの3年間に生まれた子供たちは“団塊世代”と呼ばれ、高度経済成長期を支える屋台骨として成長していくこととなる。

時流を見極めた事業拡大の軌跡

町工場から大手王冠メーカーへ

最初は、小さな町工場だった。生業は、ガラスびん、キャップ、そして王冠の製造販売。戦時下の厳しい状況にも決して屈しない精神と、時代の動きを見抜く先見性が、成長への道を拓いていった。

二人の男の出会いから 歴史は動きはじめた

1939（昭和14）年、七島長太郎を所長とする東京真空詰研究所が開設された。当初は学校教材用のガラスびんとキャップを製造販売していたが、戦時下では軍用食品保存容器の需要



帝王王冠(株)の跡地。足立区の認定こども園となっている

が急増。長距離輸送のためのキャップライニング作業など、時代に合わせた事業拡大を図っていった。後に、同所は東京真空硝子株式会社と改称する。ある時、七島は仕事を通じて一人の男と知り合う。それが、帝王王冠製造所の経営者・遠藤虎次郎だった。七島は更なる事業拡大に向け、牛乳びんの王冠を製造していた同所への出資と経営参画を決意。そして、1941（昭和16）年1月17日、同所は帝王王冠株式会社と改組改称した。この日が、75年に及ぶ当社の歴史の第一歩となる。

戦火に見舞われても 決して事業をあきらめない

1944（昭和19）年、帝王王冠と東京真空硝子は正式に合併。同時に、ホワイトコルク株式会社と千代田王冠株式会社を吸収し、帝国プレス工業株式

会社と改組改称する。代表取締役社長には七島長太郎が就任した。その頃、当社にはガラスびんを製造する大島工場、キャップのライニングを行う尾久工場、そして王冠を製造する千住工場の3拠点があった。しかし、太平洋戦争が激化するにつれ、一般家庭の金属類さえも兵器製造に用いられるようになる。資材の激減に伴い、小さな町工場は次々と廃業。やがて、どこも開店休業状態に陥っていった。そして、1945（昭和20）年6月に東京を襲った空襲で尾久工場は炎上、全焼してしまふ。

幸い、千住工場は被災を免れたが、いづとも知れぬ空襲に備えて機械設備を移すこととなった。疎開先は、七島の故郷である福島県二本松。同地での工場再開を目指して建設の準備が進められたが、結局は実現を待たずして終戦の日を迎えた。

資材不足の苦境を打破し 積極的な事業拡大へ

戦争が終わっても、国内では深刻な資材不足が続く。特に、王冠製造に不可欠なブリキは貴重品、贅沢品とされ、ほとんど市場に出回らなかった。そのようななか、進駐軍の駐屯地を回りゴミの中からビール空き缶を集め、王冠メーカーに販売する業者が現れる。二本松から戻り11月に操業を再開していた千住工場にも、次々と空き缶が運び込まれた。空き缶は継ぎ目に沿って開き、洗浄・乾燥した後、平板プレスでメソコ型に抜く。缶ビール1個のブリキで王冠13個分のメソコが取れた。そして、シボリ型プレスでメソコにひだをつけて王冠型を整える。このようにして、空き缶を再利用した王冠製造が行われていた。



帝王王冠製造所の従業員

1941-1950

この年代の 主なできごと

第一次世界大戦から引き続き、世界は戦争の波のなかにあった。戦局は次第に激化し、太平洋戦争において日本は敗戦。進駐軍管理のもと、深刻な食糧難や資材不足に見舞われながらも、焼け野原から再興へと歩みはじめる。1950（昭和25）年に勃発した朝鮮戦争は特需景気をもたらし、日本経済は活気を取り戻した。

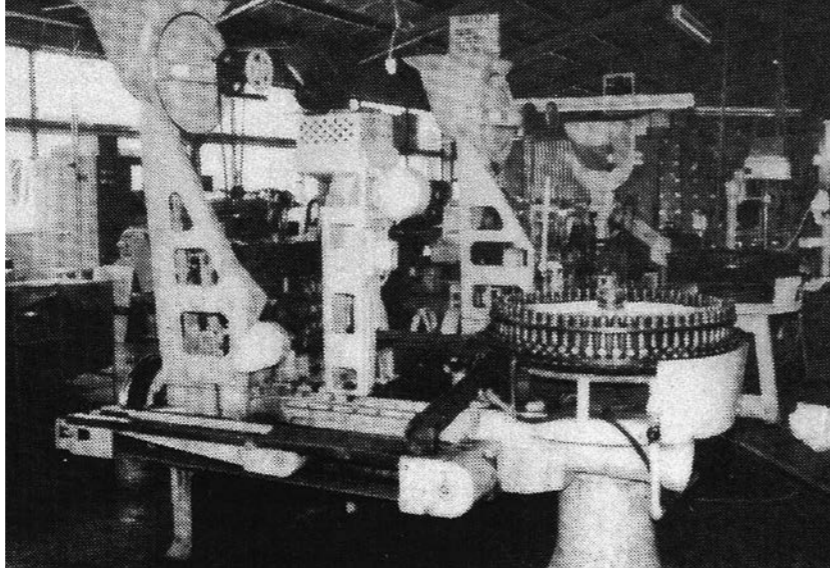


若き日の内田雅夫(右)と三輪二郎(左)
(ハルビンビール社東京事務所にて)

盤石な足場を固め 次なる飛躍への一歩を

厳しい食糧事情は続いてきたが、1948（昭和23）年には一部の都市でウイスキーの希望配給が実施されるなど、復興の兆しは見えはじめていた。この頃にはデイスクのはめ込みと密着も自社で内製化できるようになり、帝国プレス工業は信頼できる王冠メーカーとしてのポジションを着実に構築していった。

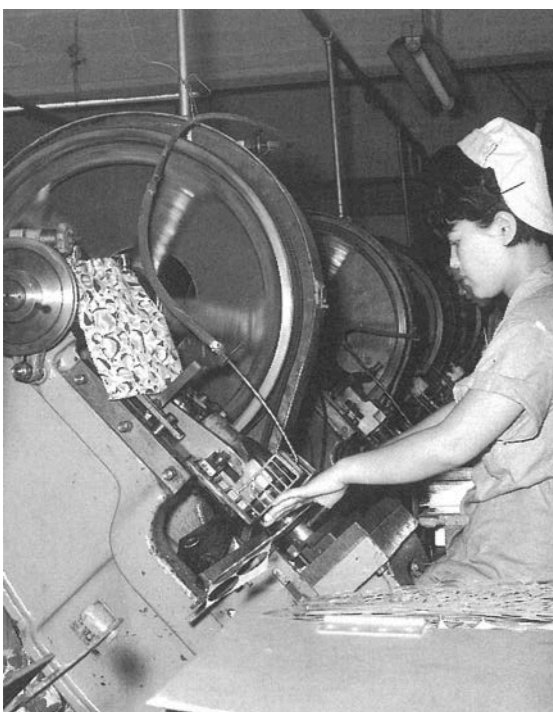
そして1949（昭和24）年2月、帝国プレス工業は、株式会社クラウンコルク商会への王冠製造における技術協力を決定。足並みをそろえて両社の王冠販売ルートを整え、より強固な地盤を固めようと考えたのだった。この協調路線はやがて両社の合併へとつながっていくのだが、それはもう少し先の話である。



アセンブリングマシン(密着機)



空襲で廃墟と化した東京の街



1個抜きプレス機

1941-1950

[昭和16年～昭和25年]

太平洋戦争の戦火が日本本土にも襲いかかり、貧困と恐怖に苦しむ時代が訪れた。

1945年、第二次世界大戦は終結し、敗戦国となった日本は焼け野原から復興へ向けて再び立ち上がっていく。

世の中の主なできごと

NCCの主なできごと

1941

12月8日 真珠湾攻撃から太平洋戦争勃発

日本海軍は、ハワイ・オアフ島の真珠湾にあったアメリカ海軍の太平洋艦隊と基地を奇襲攻撃。これにより、アメリカ合衆国議会は開戦を宣言した。その後、ドイツの宣戦布告など戦局は地球規模に拡大していくこととなる。

1943

9月21日 学徒出陣が決定

第二次世界大戦末期、日本は兵力不足にあえいでいた。そこで、それまでは26歳以下の大学生に認められていた徴兵猶予を文科系学生については停止。20歳以上の学生を入隊・出征させて戦地に送ることとなった。

1944

1月26日 東京・名古屋で初の疎開命令

戦局の悪化に伴い内地空襲の恐れが現実問題となり、政府は東京と名古屋に最初の疎開命令を出した。大阪、神戸、横浜などの大都市もその後が続くなか、特に小学校の学童集団疎開に注力。地方の受け入れ体制も整備された。

1945

8月15日 第二次世界大戦が終結

日本はポツダム宣言を受諾し、第二次世界大戦は終結の日を迎えた。昭和天皇による玉音放送により、国民は日本の敗戦を知る。以後、日本は連合国軍の統治下に置かれ、ダグラス・マッカーサー率いるGHQが東京に進駐。皇居の隣に本部を構え、次々と日本統治の施策を実施していった。

1949

10月1日 中華人民共和国成立

1930年代から続いていた国共内戦を制した中国共産党の毛沢東は、中華人民共和国の建国を宣言。以後、30年余りにわたって最高指導者としての地位に就いた。巨大な国土、世界一の人口を誇る中国は、社会主義国家としての道を歩みはじめた。

1950

6月25日 朝鮮戦争勃発

北朝鮮が韓国との国境線としていた38度線を侵攻し、朝鮮半島の主権を巡る戦争へと発展した。日本は軍需景気に沸いたが、一方でGHQからの要請を受けて海上保安官をはじめ8,000人以上が戦地に赴くこととなった。

1941

1941

1月17日 帝国王冠(株)設立

前身となる帝国王冠製造所が改組・改称して設立された。帝国王冠製造所は、牛乳びんの王冠などの製造販売をする会社。千住に工場があり、社長は遠藤虎次郎。

1944

12月19日 商号を帝国プレス工業(株)と改称

帝国王冠(株)と東京真空硝子(株)が合併。東京真空硝子(株)は尾久に工場があり、社長は七島長太郎。軍需用の保存食品が増え、キャップにライニングして販売していた。

1945

千住工場 設備を福島県二本松へ疎開

6月19日 尾久工場 空襲により全焼

8月15日 終戦、復興開始。当社の第二の出発点となる

1947

千住工場 整備改修

事務所と製造所が混沌としていたのを区別し、双方の能率を上げた。

1948

8月25日 資本金100万円に増資

1949

2月 (株)クラウンコルク商会と協調始まる

1950

鉄鋼業界が再興、食缶用のブリキ板も製造開始

6月 (株)クラウンコルク商会 与野から工場を移転し小台工場を新設

1950